

東洋史研究

第四十九卷 第一號 平成二年六月發行

「牧地都市」と「墓廟都市」

——東方イスラーム世界における遊牧政權と都市建設——

羽 田 正

はじめに

I ガザニーヤ

1 ガザニーヤ建設の事情

2 ガザニーヤの立地

3 ガザン以後のガザニーヤ

II スルターニーヤ

III ナスリーヤ

おわりに

はじめに

1

フランスの歴史學者、J. オバン教授は、イスラム世界におけるイラン都市の獨自性を初めて指摘した先驅的な論文の

中で、イラン高原に集住地が生まれる要因を、地理、經濟、政治という三つの方面から検討している。⁽¹⁾多岐に亙る彼の論旨を要約して述べると、およそ次の様なことになる。

乾燥地帯にあるイラン高原では、都市が生まれる際、地理的條件が先ず優先する。集住地に水を供給できる高地の周縁に都市が出来るのである。そして、これらの都市は廣大な農村地帯を周圍に持つており、それとは分離出来ない關係にあった。次に、自然條件は不利であっても、經濟的要因によって、商業ルート上に都市が生まれることがあった。但し、このような都市は、南イランに多く見られるように、交易路が變化すればすぐに衰えていった。第三に政治的要因によって都市が生まれることがあった。戰略的據點として重要な場合、利害關係を有する集團が壓力をかけた場合などがこれにあたる。遊牧民が政治權力を握った時代に生まれた都市もこの範疇に入る。彼らの交通路は、通常の隊商路とは異なっており、地理的に不利な場所が多かったが、特に、モンゴル時代にはその線上に多くの建造物が出来た。しかし、これらは王子の氣まぐれによる一時的なもので、彼らが傳統的な都市に親しむようになると、すぐに消滅した。唯一、スルターニヤだけが十七世紀まで残ったが、この町は中央アジアでは早くから知られた都市と牧地の結合體 (*association de ville-pâturage*) の典型で、その「生存」理由は、遊牧部族民の市、戰略據點、東西交易路の線上という三點にあった。

このオバン教授の見解の中で、特に我々の興味を惹くのが「都市と牧地の結合體」という考え方である。これを、「牧地都市」と呼ぶことにしよう。十一世紀以後に見られるトルコ・モンゴル系遊牧部族のイラン高原への流入の結果、イラン社會の様々な分野にその影響が現れるようになる。「牧地都市」もその一つで、遊牧民の政治權力が特に強力となったモンゴル時代に、この種の獨特な都市が生まれたというわけである。その特徴としては、まず何よりも遊牧民の滞在する牧地と都市市街地の結合ということが挙げられるが、それ以外にも、スルターニヤ「生存」の三條件はそのまま「牧地都市」一般の特徴と考えることが出来る。

その後モンゴル時代以降の東方イスラーム世界における都市建設とそのプランについての研究が進み、各都市の具體例⁽²⁾

が徐々に知られるようになる⁽³⁾。「牧地都市」という概念だけでは説明出来ない都市も新しく建設されていることが分かってきた。今や、遊牧政權による都市建設の歴史を新たに體系的に捉え直してみることが可能になってきているように思える。そこで、本稿でははじめにモンゴル人による本格的な都市建設の嚆矢となったガザニーヤ Gassaniya を取り上げ、建設の事情、その立地、建設後の歴史を史料に基づいて出来るだけ詳しく検討する。次いで、十四世紀前半のスルターニーヤ、十五世紀後半のナスリーヤについて調べ、これら三つの都市に見られる共通の特徴を論じたい。そして、これらを單に「牧地都市」としてだけ考えるのではなく、「墓廟都市」としても捉えねばならないこと、ワクフが都市の「生存」に重要な役割を果たしていたこと、遊牧政權による都市建設が決して一時的なものではなく、その流れは十七世紀初めのシャー・アッバースによる新イスファハーン建設にまでつながることなどを明らかにしたい。

I ガザニーヤ

1 ガザニーヤ建設の事情

ガザニーヤとは、イルハン朝第七代の君主、ガザン⁽⁴⁾ハン（一二九五—一三〇四）が築いた自らの墓廟とそれに附屬する慈善、宗教施設の總稱である。この複合建築物を中心としてその周圍に市街地が出来、シャーム、シャム、シャンプ、シヤンペ⁽⁴⁾ーガザンなど様々に呼ばれるようになるが、ここでは特に斷わらない限り、この都市のことをシャームと統一して記すことにする。まず、ガザニーヤが建設されるに至った事情から考えてみよう。

古來トルコ民族は、族長や有力者が没すると、その生前の勳功を稱えるために立派な墓を作り、時には紀功碑をも立てる風習を有していた。北アジア草原にはそのような墓や碑が今日もなお点在している。突厥のいわゆるオルホン碑文はその好例であろう。この風習は、彼らがイスラムを受容しても變わらず、多くのイスラム教徒トルコ人の支配者が、その廟

を後世に残した。西アジアに入ったトルコ人も例外ではなく、イランではセルジューク朝期に既に多くの廟が作られている。レイにある通稱トグルル・ベグ（一〇三八—一三六三）の廟やメルヴにあり巨大なドームを有するスルタン・サンジャル（一二七—一五七）の廟は、その代表と言えよう。⁽⁵⁾

これに對して、同じ遊牧民とはいえモンゴル人は、元來その君主の墓の存在を祕密にしてきた。モンゴル高原にある筈のチンギス・ハンの墓の所在地が明らかでないことはよく知られた事實である。この傳統は、フラグの開いたイルハン朝にもそのまま持ち込まれ、歴代イルハンの墓所は、誰にも知られないように人里離れた場所に作られた。その周邊は禁地（*burg*）とされ、人が近づくことのないように、嚴重に警備されていたという。⁽⁶⁾

ところが、第七代のガザン・ハンの時代になって、この傳統は大きく揺らぐことになる。『集史』によれば、イスラムに改宗し、社會の様々な方面で因習を打破して多くの改革を行なったことで名高いこのハンは、祖先傳來の墓廟觀について次のように語ったという。

我らの祖先の傳統（*rasm*）がかくの如くであつても、またもしムスリムが自分の墓を定めることを望まなくとも、（我らの）信仰に混亂は起らない。しかし、これ（墓を定めないこと）には何の利益もない。我らはムスリムとなつたのだから、我らの慣習（*ʿāda*）もまたイスラムの道の上にあらねばならない。特に、イスラムの諸儀禮（*ʿibādāt*）はかの風習（*ʿāda*）よりはるかに優れているのだから。⁽⁷⁾

この言葉のあと、ガザンは「イスラムの諸儀禮」に従つて、マシュハドのイマーム・レザ・廟などいくつかの聖廟を巡禮し、その壯麗さに感動し、自らの廟を建てようと思ふに至つたという。この時のガザンの心境は、この帝王自身の言葉として次のように傳えられている。

この様に死に、その墓廟がかくのごとき者をどうして死者の中に數えることが出来ようか。この死は他の者の生より良い。我らには（彼らほどの）敬虔さはないが、彼らにならうと、我らの永久の住處となるように「敬虔の諸門

(*abūz al-bīr*)」を建(8)つた。その祝福 (*baraka*) によつて至高なる神の恩寵を得、不斷の善行を貯えるために、この方法で慈善と喜捨を行おう。

この言葉から、我々はガザンによる墓廟建設の意圖を少なくとも二つ知り得る。一つは後半部にあるように、この時代しばしば「敬虔の諸門」と呼び慣わされた慈善用施設を墓廟に附屬して作り、これに財産を寄進することでムスリムの義務を果たし、神の恩寵を得ようとするものである。もう一つは、上の言葉の前半部から読み取れるように、彼が詣つた他の聖廟にならって、十分に管理された立派な墓廟に眠り、多くの人々がそこを訪れてくれるようにすることであった。それにより自らの魂が安らぎ、その名前と偉業が後世に永く傳わるようにという希望があったことは言うまでもない。慈善用施設に人々が集まることはこの意味でガザンにとって一舉兩得であった。

廟の建設地として、タブリーズの南西郊外、アーデリーヤ綠地・庭園 (*Bāḡ-i 'Ādiliya*) の中のシャーム (*Šām*) と呼ばれる場所が選ばれた。⁽⁹⁾ この地には既に、ガザンの父、アルグンニハン (一二八四—九一) の命によって建築物が建てられていた。『集史』アルグンニハン紀は次の様に言う。

アルグンニハンは大規模な建築工事を好み、タブリーズのシャム (*Šām*) の地に大きな町を作った。そこには、大きな隊商宿 (*caruḥa*) が建てられた。⁽¹⁰⁾ (ハンは) 望む者は誰でも、その地に家を建て、水路 (*kahriz*) を流すようにと命じた。それをアルグニヤと名付けた。

ガザンは、父帝ゆかりのシャームを選定すると、直ちに墓廟の建設を命じた。彼はこの建築事業に非常に熱心で、暇さえあれば建築現場に自ら出かけ、技術的な質問に答えるとともに、親しく指示を出したという。⁽¹¹⁾ 彼が、廟のドームをスルタンニサンジャルのそれより高くするように、すなわち世界一とするようにと嚴命を下したことから、その意気込みが感じられよう。⁽¹²⁾ 建設は西暦一二九七年一〇月五日 (ヘジラ暦六九六年 *Du al-Hiḡa* 月一六日) に始まり、一三〇四年五月のガザンの死後も續けられた。⁽¹³⁾ 出来上がった墓廟はさすがに素晴らしいもので、十二面體の外観を持ち、ドームの頂上までの

高さは一三〇ガズ (*gaz*) だったという。内部では一つが一五マンの重さの金、銀製のランプ八〇が、廟内を明るく照らし、三〇〇マンの瑠璃が天井や壁の模様のために使用されていたという。⁽¹⁴⁾

この墓廟とともにシャームには多くの慈善用施設が建てられた。いま同時代史料である『集史』『ワッサーフ史』によって、主なものを書き出してみると次の通りである。⁽¹⁵⁾

- 1、墓廟 (*'imārāt*)
- 2、金曜モスク (*masǧid-i ǧam'*)
- 3、二つのマドラサ (シャーフイー派とハナフィー派のもの)
- 4、スーフイー道場 (*xānqāh*)
- 5、サイイドの館 (*dār al-siyāda*)⁽¹⁶⁾
- 6、病院 (*dār al-sifā*)
- 7、圖書館 (*bayt al-kutub*)
- 8、天文臺 (*rasād*)
- 9、法律の館 (*bayt al-qānūn* または *bayt al-hikmīya*)⁽¹⁷⁾
- 10、ワッフ管理人の邸宅 (*bayt al-mutavallī*)
- 11、貯水場 (*hawḍ rāna*)
- 12、公共浴場 (*garnāba-yi sabīl*)

建造物群が完成すると、その周辺には居住区が生まれた。以前からあったであろうアルグニーヤの居住区と合わせて、新しく一つの町が誕生したのである。ムストウフィーが「小都市 (*ṣāhrā'*)」と記しているように、⁽¹⁸⁾それは町としては小さかった。おそらくは、ガザニーヤで働く人々が主に住んだのだろう。但し、ガザンがこの町のために計畫した城壁は、舊

タブリーズ市街のそれより大きかったという。彼はシャームの居住区とともにその周囲の多くの緑地をも圍い込もうとしたのである。⁽¹⁹⁾ 結局ガザンの早すぎた死によって、工事は途絶し、壁は完成しなかったが、ガザンが緑地、バードをも圍い込む形で町を作ろうとしていたことにとりあえず注目しておきたい。後にも述べるように、ここに、遊牧民による町作りの特徴がよく表われていると思われるからである。

さて、『集史』には、ガザニーヤに寄進されたワクフ財産の運営規定がかなり細かく記録されている。⁽²⁰⁾ 論旨から少々外れるのでその詳細を記すことは出来ないが、二、三例を挙げてみよう。ハーンカーフでは、朝夕、貧民と住人に食事が給され、困窮者用に衣類、靴などが用意されていた。マクタブでは、一〇〇人の孤児のためにコーランが教えられ、なにがしかの金額が、これら孤児の割禮用に定められていた。マドラサや天文臺で講義が行われ、病院では病人の治療が行われていたことはいうまでもない。

これらとともに注目すべきは、廟の維持、管理のための規定である。絨毯、明り用の蠟、油購入費、ハーフェズら職員の給與が定められ、金曜の夜ごとに甘い菓子配られるようになっていた。また、廟にお参りにやってきた人々には、庭園の東屋でスープが振舞われ、ガザンの命日には、招待された人々に特別の御馳走が供され、そのあと喜捨が行われることになっていた。慈善事業と並んで、廟の維持、墓廟への人々の墓参の奨励に多大な配慮が拂われていたことが分かる。慈善事業そのものも、それによってガザンが神の恩寵を受けることを主たる目的にしていたことを考慮すれば、ガザニーヤへのワクフ寄進は、専らガザン個人のためのものであったとも言えよう。

このようなガザニーヤの一大コンプレックスを管理、維持そして運用してゆくためには巨大な財源が必要であり、ガザンは聖法上合理的に彼の財産となっているものをすべてワクフとしてこれに寄進したという。⁽²¹⁾ 具體的にそれがどのようなものであったのかは、今日までワクフ文書が傳わっていないため、残念ながらよく分からない。しかし、當時の他のワクフ寄進の例から考えて、⁽²²⁾ イルハン朝領内の王領地からの収入の一部がワクフの財源とされたことはほぼ間違いないだろう。

ガザンがカルバラ―地區に運河を開き、その水と土地の權利を購入して、ガザニーヤに寄進したことを傳える『集史』の⁽²³⁾記事もこの推定を裏付ける。

2 ガザニーヤの立地

ガザニーヤに關しては、上で一部述べたような施設の運用の實際、ワクフの財源、建物の詳細なプラン、建築史上の特徴などなお多くが未解決のままで残されているが、ここで取り上げたいのは、その建設位置を巡る問題である。ガザンハンは、何故タブリーズ郊外のシャームの地を自らの墓所として選んだのだらうか。自らの名を残すために壯麗な墓廟を作ることを計畫したガザンである。廟の建設地についても熟考したに違いない。以下この問題について考えてみよう。

定住地帯を征服し、政治的、經濟的、さらには文化的にも様々なレベルで都市と關係を持つようになったモンゴル支配者層は、好むと好まざるとにかかわらず、都市に接近することになる。しかし彼らは狭くて閉鎖的な街區、細く曲がりくねった街路に象徴される都市の内部には、特別の場合を除いては入ることはなかったし、まして住もうとはしなかった。都市に居住することは遊牧民的な心性に合致しなかったのである。彼らは、例えばオスマン朝のイスタンブルの如き、王宮、行政府を備えた今日我々が考える意味での首都を持つことは決してなかった。それでは、必要があつて都市を訪れたとき、彼らはどこに滞在したのか。町の郊外に點在する綠地、すなわちバークに天幕を張つて居住したのである。

一例として、ガザンが一時その首都としたとも言われるウージャンが擧げられよう。彼はこの町の郊外の草地 (*mar-⁽²⁴⁾gāh*) に塔、浴場、大建造物を建立させ、自らはその地の綠地・庭園に黄金の天幕 (*mar-gāh-i-zarrin*) を張つてそこに宿營したという。

建造物を建てるかどうかはしばらく置くとして、遊牧民系の君主が都市郊外の綠地、バークに滞在するというこの現象は、既にオバン教授をはじめ多くの研究者も言及しているように、イルハン朝だけに限られるのではなく、トルコ・モン

ゴル系の遊牧部族が政權の中樞を占めた十三世紀以降の東方イスラーム世界にある程度共通に見られる。⁽²⁵⁾ サマルカンドの町をこよなく愛したと言われるティムールが、遠征から戻って滞在したのはサマルカンド市内ではなく主として郊外のバークであった。彼がカステリヤの使節クラヴィホを謁見し、宴會を開いたのも市外にある緑濃いバークの一つにおいてだったのである。⁽²⁶⁾ ティムールの子シャー・ルフ以後ティムール朝の君主たちの多くが據點を置いたヘラートにも多くのバークがあった。⁽²⁷⁾ ウズベクによって王朝が崩壊する直前の一五〇六年、ティムール朝の王子バールがこの王朝最後の君主、バディー・アッザマーン Badī' al-Zamān に迎えられたのは、この君主の父、スルタン・フサイン Sulṭān Ḥusayn が作らせたバーク・ジャハーン・アーラー Bāgī' Gāhān ārā においてであった。⁽²⁸⁾ また、白羊朝、サファヴィー朝の都でも同様、支配者は都市郊外のバークに根據地を置いたが、これについては後に章を改めて詳しく述べることにする。(後述一八、二二頁)

タブリーズ郊外にあったシャームもこのような遊牧民の滞在地であったことは十分豫想されよう。上述したアルグンによる都市建設が既にそれを示している。それ以外の史料によってこのことを證明しておこう。

この地の地理的條件については、ほぼ同時代の史料である『心魂の歡喜』が端的に言い表している。

タブリーズでは三〇ガズ(gaz)内外井戸を掘れば水にあたる。シャームでは一〇ガズで水に到達する。ラシード區(Rāṣīd Rāiṣ)では七〇ガズ掘らねばならない。⁽²⁹⁾

この記事からシャームはタブリーズ周邊では比較的水を得やすい土地であったことが分かる。十七世紀にここを訪れたエヴリヤ・チェレビは、この地では七月でも井戸の水は氷のように冷たいと記している。⁽³⁰⁾ 水があれば、植物が成育する。『集史』にはウーシャーンの場合と同様、“margzār-i Šām”すなわち「草の豊かなシャーム」という表現が見られる。⁽³¹⁾ シャームは遊牧民にとって特に重要であった豊富な水、草という二つの要素をとくに兼ね備えていたのである。モンゴル人のハンたちは、バーク・アーデリーヤに天幕を張って滞在したのである。

ガザン・ハンが、彼の政敵で前のハンでもあったバイドゥを破って初めてタブリーズにやってきたときに逗留したのもシャームであつた。⁽³²⁾ またガザン以後も、多くの有力な遊牧民指導者たちがこの地に滞在したことが史料に記録されている。マリク・アシュラフ、ティムール、⁽³³⁾ さらに、十六世紀になつても、サファヴィー朝のシャー・イスマーイール、シャー・タフマースプらが、シャンベリ・ガザンとも呼ばれるようになっていたシャームを彼ら自身の滞在地として、また軍隊の集結地として利用していた。⁽³⁴⁾ この地がタブリーズ攻防の要であつたこと（後述二三頁）とあわせて、シャームが「牧地都市」の條件である遊牧民の集結地、軍事的據點としての機能を持っていたことは明らかだろう。

シャームにやってくるのは遊牧民だけではなかつた。次に引用する『集史』の記事により、我々はシャームを選択したガザンの周到な計畫を一層よく理解できる。

彼（ガザン・ハン）は、「敬虔の諸門」が作られたシャンブまたはシャムとも呼ばれる場所に、この「敬虔の諸門」と多くの緑地・庭園（パーク）が圍い込まれるように、舊タブリーズの都城よりも大きいもう一つの町を作つた。それはガザニーヤと名付けられた。ルームやヨーロッパ（*Europe*）から到着した商人たちに、そこで荷を開くように命じた。⁽³⁵⁾ なぜなら抵抗（*munzarat*）が起らないように、その地のタムガチとタブリーズのそれは、同一になっているからである。

東方イスラーム世界においてタムガチの果たした役割にはなお不明の點もあるが、彼らが都市においてタムガチと呼ばれる商税の徴収にあたっていたことは確かである。⁽³⁶⁾ 残念ながら、具體的にシャームの商取引を記録した史料は管見の限りないが、上の引用文、そして先に挙げたアルグニーヤについての記事から考えて、ガザンが、タブリーズ西郊にあつたシャームを西方からの商人による物資の集積場所にし、交易の一大中心としようとしていたことは明らかだろう。商人、物資、そしてそれに引き寄せられて集まってくる人々。國際貿易のルート上に新しく作られたこの町は、このように遊牧民以外の人々も多數集まる場所であつた。

以上、シャームについての諸史料の記述から、この地が「牧地都市」としての條件を十分に備えていたことが明確になった。ここまで来れば、ガザンがシャームを自らの奥津城として選んだ理由はもはや言うまでもあるまい。この地は「牧地都市」として遊牧民、定住民を問わず多くの人々をひきつける場所であった。自らの墓廟が常に人目につき、多数の人々がそこに墓参することを願うガザンにはうってつけの地だったのである。

さて、シャームはこの様に「牧地都市」ではあったが、それ以前のアルグニーヤやウージャンなど同種の都市と比較すると明らかに異なつた一つの特徴をも有していた。それは、君主の墓廟を中心とする宗教施設群が町の核となっており、そこに、多大なワクフ寄進がなされていたという点である。ガザンがこの町を建設した意圖が何よりも自らの墓廟のためであったことを思えば、この町の「墓廟都市」的側面を見落とすことは出来まい。それは、以後のガザニーヤの歴史を辿ることにより、一層明確となろう。

3 ガザン以後のガザニーヤ

ガザンが没し、生前の望み通りその墓廟の主となつた後、シャームの町はどのような運命を辿つたのだろうか。その「牧地都市」としての繁榮は、束の間のものだったのだろうか。結論から言えば、その後もガザニーヤ、そしてその周囲の街区を含むシャームの町は存在し続けた。イブン・バットウータが第九代イルハン、アブー・サイード（一二三六—一二三五）の一行に従つてバグダードからタブリーズを訪れたとき、この著名な旅行家はシャームの宿泊施設に逗留している。⁽³⁷⁾ ティームールの傳記作者として有名な *Nizām al-Dīn Samī* をはじめ、幾人かの人物がこの地出身を意味するシャーミーまたはシャンベッガザニーというニスを有している。⁽³⁸⁾ また時代は下るが、ヘラートのティームール朝最後の君主、バディイー・アッザマーンは、シャイバーニー・ハンによつてヘラートを逐われた後、一時サファヴィー朝のシャー・イスマイーールの保護を受けるが、その時イスマイーールがこの亡命者を住ませたのがシャンベッガザンであった。⁽³⁹⁾ 遊牧民出身の君主たち

がしばしばこの地を訪れていたことは既に上で見た通りである。オバン教授の説とは異なり、スルターニーヤ以外にも二〇〇年以上存続した「牧地都市」があったのである。

ワクフ財産の管理権は、イルハン朝滅亡後もこの王朝を繼承する國家の手に引き繼がれていたようである。⁽⁴⁰⁾十五世紀については適當な史料がないが、少なくとも十六世紀サファヴィー朝の時代には國家がワクフ管財人を任命していたことが、イスカンダル・ムンシーの記事によって分かるからである。⁽⁴¹⁾この王朝の第二代王、タフマースプ（一五二四—一七六）の治下、アミール・アブル・ワリー Amir Abū al-Valī とその兄弟ミール・アブル・ムハンマド Mir Abū al-Muḥammad がガザンのワクフ (*awqāf-ı şērāfi*) の共同管財人に任ぜられた。アミール・アブル・ワリーはこの職に就く前、マシハドのイマーム・レザー廟の管財人であり、またタフマースプの治世末期の異動ではアルダビールのサファヴィー家歴代の聖廟 (*Āstāna-yi muqaddasa-yi safaviya*) の管財人となった。

この二つの廟はサファヴィー朝國家にとって政治的にも經濟的にも特別な意味を持っていた。イマーム・レザー廟は、言うまでもなく、「國教」十二イマーム派の聖地であり、既にガザン・ハンの時代から知られた巡禮地であった。その寄進財産は膨大なものであったろう。⁽⁴²⁾サファヴィー家歴代の墓廟は、シャー・イスマーイールに至る王の父祖が葬られ、王家の、そして同時にサファヴィー教團の聖地として重要であった。シャイフ・サフィー以来アルダビールの廟にいかに多大な寄進がなされたかはオバン教授の研究によって明らかにされている。⁽⁴³⁾

アミール・アブル・ワリーはガザニーヤの管財人であった前後にこのように特別な二つの廟の管財人となっていたのである。この事實は、サファヴィー朝初期においてもガザニーヤが經濟的に如何に無視できない重要性を有していたかを雄辯に物語っている。

とすれば、イルハン朝滅亡後二〇〇年間、ガザニーヤはほぼ生前ガザンが望んだ通りの姿で維持されてきたと言える。この状況が大きく變化するのが十六世紀後半から十七世紀前半にかけてのサファヴィー朝とオスマン朝の間の國境紛

争期であった。

戦争は、タフマースプ死後のサファヴィー朝國內の動搖を看取したオスマン軍のアゼルバイジャン侵攻、タブリーズ占領に始まり、これに對するサファヴィー軍の反攻という形で推移し、最終的には、シャー・アッバースによってサファヴィー朝舊領の大部分が回復されて休戦に至る。三〇年に及ぶこの戦いの火はアゼルバイジャン全域に及び、特にその首邑タブリーズは幾度となく兩軍の衝突の場となった。一〇一一—一二／一六〇二—〇四年、アッバースがオスマン軍を撃破し、タブリーズに入城しようとした時には、市街は荒廢しきり、この王が一時的にせよ留まれる屋敷は全くなかった。アッバースはシャンベリ・ガザン（シャーム）に滞在し、挨拶に出向いてきたタブリーズの人々を謁見したという。⁽⁴⁴⁾

一〇一八—一九／一六〇九—一一年、再びオスマン軍がタブリーズに向けて進軍してきた。アッバースは、ガザニヤ・コンプレックスに大砲、銃、彈藥を裝備し、信頼できる銃兵（*tuğancılar*）を送つてここを死守するよう命じた。市街の西方郊外に位置するガザニヤが一旦オスマン軍の手に落ち、市街攻撃の據點として使用されれば、事態は容易ならざることとなるのを戰略に長けたアッバースはよく知っていたのである。⁽⁴⁵⁾

この時、オスマン軍は結局タブリーズを落とすことが出来ずに撤退する。しかし、アッバースは再度のオスマン側の攻撃を豫想し、新しい強固な要塞を築いて町の防備を固めようとした。市街の東端、ラシード區が要塞建設地として選ばれ、建築用の資材は、戦亂によって崩壞、荒廢した建造物から運ぶように命令が出された。イスカンドル・ムンシーによれば、荒廢状態にあった（*virāni bā-ān rāh yafāh bud*）シャンベリ・ガザンからとりわけ多くが運ばれたと言う。⁽⁴⁶⁾但し、この段階ではまだ墓廟それ自體には手がつけられなかったものと思われる。なぜなら、以下でも述べるように、この時期以降も東西の史料には墓廟についての記事が散見するからである。その周囲の慈善施設、とりわけ十二イマーム派を公認するサファヴィー朝下では使用されなくなったに違いないマドラサやハーンカーフなどがまず取り壊しの対象となつたろう。

このような人工的な破壊に加えて、三〇〇年以上を経た古い建物をより一層荒廢させたのがこの地方に多い地震であつた。⁽⁴⁷⁾一六四〇年代にシャンベリ・ガザンを訪れたエヴリヤ・チエレビは、墓廟の一部が地震により傷んでいることを記している。⁽⁴⁸⁾また一六五一年の地震で廟のドームにひびが入ったことがタヴェルニエによって報告されており、⁽⁴⁹⁾一六六〇年代にこの地を通過したシャルダン⁽⁵⁰⁾はドームが荒廢しきつていることを傳えている。

このように、十六世紀前半までは比較的行き届いた管理体制のもとで維持、運営されてきたガザニーヤは十七世紀に入ると急激に荒廢が進んだのである。一八四〇—四二年、*ロスト P. Coste* とともにイラン各地を旅したフランダン・E. Flandin は、十八世紀末の地震によつてガザニーヤのモスクが完全に崩壞し、既に打ち捨てられていたことを記している。⁽⁵¹⁾建造物群全體が十九世紀には全くの廢墟となつていたと考えてよからう。

そして今世紀の六〇年代までは、うず高い瓦礫の山がガザニーヤの位置を示し、かつてのその巨大さを偲ばせていたが、筆者が本田實信教授、M. Y. ケヤーニー教授らからうかがつたところでは、最近のタブリーズ市街の發展、擴大に伴つてこの瓦礫の山は全て跡形もなく取り除かれ、整地されたあとには、近代建築が建てられていると言う。建立後六百年、ガザニーヤはこの世から完全に姿を消した。ガザン・ハンが巡禮に訪れ、自らの墓もかくあれかしと願つたマシユハドのイマーム・レザ・廟が今日なお數多くの巡禮者を迎え續けているのは極めて好對照であると言えよう。

さて、頻發する戦亂や地震がガザニーヤ荒廢の主たる原因であつたことは疑いないとしても、もしサファヴィー朝政府がワクフ財産を的確に管理、運用してこの宗教施設群を維持しようとしていれば、十七世紀に入つてからの急激な廢墟化はある程度防げたのではないだろうか。上で検討したワクフ管財人の人選から考えて、十六世紀中葉のタフマースプ時代までは、政府にこの様な意志があつたことは疑いない。とすれば、ガザニーヤのその後の運命を決めた政策變更は、やはりアッバース一世時代になつてなされたものと見られる。管理の放棄、ワクフ財産の他目的への轉用などが具體的な政策變更として考えられるが、アッバースが單にワクフ財産の管理を放棄したとは思えず、やはりこれを他の目的に轉用した

と考えるのが自然だろう。

残念ながらこれまでに筆者はこの政策變更を直接證明する史料を見いだせずにいる。しかし、内戦の鎮壓、打ち續くオスマン朝やウズベク族との戦争、國內の各所で盛んに行なわれた土木、建築工事などの大規模な支出によって危機的状況にあった國家財政を救うために、ガザニーヤの豊かなワクフ財産は大いに魅力あるものだったに違いない。

また、最近のマクチェスニー氏の研究によれば、アッバースは、自らが十二マーム派に歸依していることを宣傳するために、一〇一三／一六〇四—〇五年彼が長年に亘って合法的に蓄積してきた個人財産を全てワクフとし、これを十二マーム派イマームの子孫や、十二イマーム派として有名な地域の住民のために寄進したという。⁽⁵²⁾ガザニーヤのワクフ財産も、あるいはこの「聖なる」目的のために沒收され、轉用されてしまったのかもしれない。

いずれにせよ、ガザニーヤのワクフ財産をその目的通りに正しく運用することは、アッバースにとって何ら得るところはなかった。そして、既に三百年以上前にこの世を去ったモンゴルの一君主の墓廟のワクフ財産を、他のより適當な目的のために轉用することは、そのためにたとえ墓廟が荒廢しようとも、非難の對象とはならなかったに違いないのである。

このことは、逆に考えれば、十六世紀前半までガザニーヤを含むシャームの町が存續し得たのは、ワクフに支えられた墓廟の存在によるところが極めて大きかったとも言えよう。ワクフ財産が健全に運用されている限り、人々はそこに集まり、町が完全に滅びてしまうことはなかった。單なる「牧地都市」ではなく、「墓廟都市」としての性格を併せ持っていたところに、この町の「長生き」の祕密があったわけである。

II スルターニーヤ

上で述べたシャームと類似した特徴を持った都市を新しく建設することが、遊牧民的な習慣、心性をある程度有する人々の手に政治權力が握られている時代、地域に見られる特有の現象ではないかと筆者は考えている。その一例としてまず

最初に取り上げるのが、ガザンの弟で、その死後第八代イルハンとなったウルジェイト（二三〇四—二三一六）によって建設されたスルターニーヤである。⁽⁵³⁾この新しいイルハン朝の「首都」については既に本田實信氏をはじめ何人かの研究者による詳細な論考がある。これらを参考にしながら、ガザニーヤの場合と同様、その立地条件から考えてみよう。

スルターニーヤの地は、元來シャルヤーズ Saryaz の地名で知られていた。モンゴル人がここを夏營地として利用するようになってからクンクルウラン Qüngür-Ulang（黄褐色の草地）と呼ばれ、さらにウルジェイト以降スルターニーヤと稱されるようになったという。⁽⁵⁴⁾良好な牧地として知られ、既にアルグンニハンがいくつかの建築物を建て、その周囲を城壁で圍っていた。⁽⁵⁵⁾ウルジェイトはそれを承け、擴張したのである。父の事業を引き継いだという點で、まずガザニーヤとの共通點を見いだせよう。また、『集史』アルグンニハン紀には、上で引用したアルグンによるシャームのアルグニーヤ建設の記事（前述五頁）とシャルヤーズ（のちのスルターニーヤ）における都市建設の記事が並んで記されており、これもまた両者が同様な性格を持っていたことを窺わせる。⁽⁵⁶⁾

『心魂の歡喜』はこの地について次のようにいう。

その地の氣候はどちらかと言えば寒冷である。その水は井戸と地下水とから得られ、ともに佳良である。その地の井戸の深さは二、三ガズから一〇ガズまでである。その近郊一日行程の地域は寒地帯と溫地帯の兩者から成り、この地域では人間に必要なものは何でも潤澤に産する。牧地は豊かで極めて良好である。狩場にも恵まれている。⁽⁵⁷⁾

遊牧民の夏營地として當然とはいえ、ここもまた水と草に恵まれた場所だった。ウルジェイトの宰相の一人、タージャーウッディーンニアリーシャは、新しく築かれた町の郊外にこのイルハンのために壯麗な庭園（バグ）を作ったという。そしてそのバグの名残は十七世紀になってもなお見られた。⁽⁵⁸⁾冬營地と夏營地という違いはあるが、遊牧民の集結出来る場所という點で、シャームとスルターニーヤの立地はきわめてよく似ているのである。

即位直後の一三〇五年からウルジェイトはスルターニーヤの大規模な建設工事を指令した。⁽⁵⁹⁾多くのバーザルや公共施

設を作らせたこと、スルターニーヤを起點として六王道を國內各方面に定め、それらがさらに當時の國際交通幹線に連なるよう配慮したことなどから、ウルジェイトがこの地を人と物の結集點、交易の據點としようと考へていたことがよく分かる。この地がオバン氏の言う遊牧ネットワーク (réseau pastoral) とキャラヴァン・ネットワーク (réseau caravanier) の結節點として重要な意味を持つようになったことは間違いない。⁽⁶¹⁾ この點においても、スルターニーヤはシャームと共通の特徴を有していたと言える。

町の中心には、偉容を誇るウルジェイトの墓廟があり、これを取り圍んでいくつかの宗教施設が建てられた。史料によって呼稱に多少違いはあるが、『ウルジェイト史』や『集史續編』は、この墓廟とその周圍の施設をあわせて「敬虔の諸門 *Abwab al-birr*」と記している。⁽⁶²⁾ そしてこのコンプレックスにもガザニーヤの場合と同様莫大な寄進がなされたと言⁽⁶³⁾う。

遊牧民の集結地、交易の中心、墓廟の存在、という最も主要な點で、スルターニーヤは先に述べたシャームときわめてよく似た特徴を有しており、基本的にシャームと同様の目的を持って建設された都市であると言つてよからう。⁽⁶⁴⁾ ウルジェイトがこの地に町を作り人々を集めようとした理由の一つが、自らの夏營地に交易の中心を置くことによる經濟の効率化、活性化であったことは疑いない。しかし、このイルハンが、兄ガザンと同様、町の中心にある壯麗な墓廟へ一人でも多くの人々が參詣し、その慈善事業の恩恵に浴することで、死後も永遠に自らの偉業が忘れられることなく、自らも神の祝福を受けることが出来るようにと考へたことも、また事實であらう。本田氏は、スルターニーヤの建設をウルジェイトの「統治意志の發露であり、文治政策の具現であった」と記しておられるが、⁽⁶⁵⁾ 見方を變えれば、この町全體が「墓廟都市」として、ウルジェイト廟を永遠に維持してゆくための裝置であつたとも言えよう。

シャームがガザニーヤという墓廟とそこに寄進されたワクフ財産によって十七世紀まで「生存」したことを確認した我々は、スルターニーヤがやはり十七世紀まで生き延びた理由の一つとして、オバン教授の三條件以外に、この町の持った

「墓廟都市」としての性格をも附け加えることが出来よう。

III ナスリーヤ

イルハン朝が滅亡して一世紀以上経った十五世紀後半、西部イランからアナトリア東部にかけての一带は、トルコマン系遊牧民を主體とする白羊朝の勢力下にあった。この王朝の英主として有名なアブー・ナスル・ハサン・ベグ *Abū Nasr Ḥasan Beg*、通稱ウズン・ハサン *Uzun Ḥasan* (一四五七—七八) とその後継者スルタン・ヤークーブ *Sulṭān Yāqub* (一四七八—九〇) もまた、注目すべき建築事業を行なっている。

タブリーズ市街の北にバーク・サー・ハバード *Bāg-i Ṣāhibābād* と呼ばれる緑地、庭園があった。⁽⁶⁶⁾ イルハン朝初期の宰相、サー・ハ・ディーヴァーン *Ṣāhib-i Divān* のシャムス・ウッディーン・ムハンマド・ジュヴァイニー *Šams al-Dīn Muḥammad Guvaynī* に由來する名だといふ。⁽⁶⁷⁾ この地も遊牧民の滞在に適した場所であつたようで、史料は黒羊朝のジャ・ハーンシャー (一四三六—六七) の宮廷がここに置かれていたと記している。⁽⁶⁸⁾ ウズン・ハサンはこの緑地を改修して自らの滞在場所としていた。そして、彼は死後ここに葬られた。彼の墓所については、RG に大略次の様な興味深い話が記録されている。

ウズン・ハサンは、その死が近づいたとき、彼に仕えていたダルヴィーシュ・シラージュ・ウッディーン・カーシ *Ḍarvīš Sirāğ al-Dīn Qāsim* という名の一人のウラマーを呼び、次の様に語った。「私が、自らのために、墓 (*maqbara*)、ザウイーヤ、モスクを作っておかなかつたのは大きな誤りだつた。汝しか信頼できる者はいない。私の亡き後は、仕官をせず、我が墓を守り、その周りにモスクとザウイーヤを建ててくれ。永く私を慈善 (*saqā*) と善行 (*ihsān*) で記念してくれ。」

ハサンが亡くなり、スルタン・ヤークーブの御代になった時、ダルヴィーシュはその御前に出て、ハサンの遺言とそ

れを實行したいという自らの希望を奏上した。ヤークーブはこれに全面的に賛成し、八八二（一四七七八）年、良き日時を選んで工事が始められた。多額の資金を使用して、七年後、八八九（一四八四—八五）年にナスリーヤ・イマール・レット *Imarat-i-Nasriya* が完成した。⁽⁶⁹⁾

この様に、ウズン・ハサンの墓所、ナスリーヤはこの王が自ら建てたものではない。また、この王の場合は特別の墓廟は作られず、マドラサがその墓所とされた。しかし、墓を含む宗教施設群の持った意味—慈善による被葬者の名の永續と被葬者への神の恩寵—は、上のウズン・ハサンの言葉に明瞭に現われているように、かつてのイルハンたちの時代のそれと全く同様であったと言える。

遊牧民の滞在地、君主の墓の存在と、イルハン朝時代の「新都市」の有した特徴の中の二つがサーヘバーバード地區にもあったことが確認された。残る一つ、交易の中心という側面をもこの地は十分に有していた。十六世紀後半に書かれた RG に次の様な記事があるからである。

今日タブリーズでメイダーネ＝サーヘブル＝アムル *Maydan-i-Sahib al-amr* として知られるバーゲ＝サーヘバーバード *Bag-i-Sahibabad* は、かつて廣大なメイダーンで、村の人々があらゆる産物をここで賣っていた。立てられたテントの下で、多くの商人が品物を並べ商っていた。だんだんと露店 (*chattrisīnān*) が商店 (*dükkan*) となり、今日は立派なバーザールである。メイダーンの意味が適當と思われるいかなる場所もここには残っていない。⁽⁷⁰⁾

この様に、サーヘバーバードは「牧地都市」であり「墓廟都市」でもあるというイルハン朝期の「新都市」が持っている基本的性格を全て備えており、その意味でシャーム、スルターニーヤの後を繼ぐものと言えよう。しかし、これとは別に、ガザニーヤ建設後百数十年を経て築かれたこの町には注目すべき一つの新しい特徴が見られる。それは、メイダーン（廣場）の存在である。

サーヘバーバードのメイダーンの起源はナスリーヤよりも古い。ジャハンシャーを倒したウズン・ハサンが、初めて

黒羊朝の據點タブリーズに入城する時に、既にこのメイダーンを通過しているからである。⁽⁷¹⁾町の郊外にあったこのメイダーンは、イスファハーンにあった二つのメイダーン同様、馬場、ポロ競技場、市場などのための複合空間として使用されていたのだらう。⁽⁷²⁾ところで、このメイダーンをも含むナスリーヤ地區については、十六世紀初頭にタブリーズを訪れた一ヴェネチア人商人が貴重な記録を残している。いまこの旅行記の記述を要約し、往時のナスリーヤ地區を復元してみよう。⁽⁷³⁾

ウズン・ハサンの「王宮」を含むナスリーヤ地區は、タブリーズの市街から北に川一つ離れた市外にあった。地區全體は大きく二つに分かれる。一つは「王宮」のある綠地・庭園、もう一つはメイダーンとその周囲の建造物である。庭園の中央にハシュト・ベヘシュト宮（八樂宮）という名の「王宮」があった。この「王宮」は、庭園の高みに建てられており、内部の床は絨毯敷、天井や壁は、戦争、狩獵、使節謁見などの圖柄の美しい繪畫で飾られていた。これはウズン・ハサンが謁見のために用いたものである。ここから一矢の距離にハレムがあった。庭園は壁で圍まれており、中に入るための門が東、南、北の三方向にあった。北門は、煉瓦敷の回廊になっており、三〇〇頭の馬をつなぐことができた。門を入ると、庭園の中を「宮殿」への舗裝路が續いていた。南門は一種の通用門で、入るとすぐに庭園が廣がっていた。東門は、メイダーンに面しており、その上に大きな建物が建っていた。階上には、メイダーンに面して回廊があり、そこからのメイダーンの眺めは素晴らしいものであった。ウズン・ハサンは、メイダーンで何か催しがあるときには、決つてここにやつてきた。また、外國の使節がやつて來るとよくこの場所へ案内した。メイダーンに面しては、モスクと病院があった。

この記事で、ウズン・ハサンの建立とされている八樂宮は、ペルシア語史料によると、彼の息子、スルターン・ヤーコーブの命により八九四（一四八八―八九）年⁽⁷⁴⁾に作られたものである。また、ヴェネチア人商人は記していないが、メイダーン周辺にはこの他マドラサ、ハーンカーフなど宗教施設があったことも確かである。⁽⁷⁵⁾この様に、上の記事を全てそのまま

信用するわけにはいかないが、大筋においては、これを認めてもよからう。

メイダーンやその周囲に、宗教的、商業的な機能が集中することは、既にセルジューク朝時代のイスファハーンにも見られた現象で、このナスリーヤ地區が初めてではない。⁽⁷⁶⁾しかし、王や遊牧民の有力者が居住するバークと宗教・商業機能の集中する市街地がメイダーンを結節点として有機的に結びついた都市計畫は、これ以前にはなかった。ここに遊牧政権による「新都市」の系譜の中でナスリーヤが有する意義がある。

メイダーンを中心とするナスリーヤ地區は、以後少なくとも十七世紀前半まで様々な都市的活動の交錯する場であり續けた。處刑が行なわれ、ポロや弓くらべに人々が打ち興じ、アーシューラーの行事が大々的に開催されたりもした。サファヴィー朝の王が、新たにモスクを建て、メイダーンでは王や人々がタブリーズを訪れた内外の使節と會見したりもした。⁽⁷⁷⁾それ以後については、オスマン＝サファヴィー戦争の際、ここが一種の前線基地として使用されたこと以外、目下のところ必ずしも明らかには出来ない。⁽⁷⁹⁾だが、註(66)で述べたように、十九世紀までには既に擴大した市街地に含まれるようになっており、地區全體が荒廢してしまうことはなかった。その理由としては、タブリーズ舊市街に近かったこと、メイダーンという核が出來、商業活動が衰えなかったことなどが考えられよう。

おわりに

以上の検討を通じて、十四—十五世紀に遊牧民君主によって建設された三つの新しい都市が、共通して「牧地都市」「墓廟都市」的な特徴を有していたことが明らかとなった。これらの都市には、遊牧民君主や有力者たちが滞在できる緑地であるバークの存在が不可欠であり、彼らはここに天幕を張って生活した。一方、このバークに隣接したり、囲まれたりして、墓廟を中心とした宗教施設群を核とする市街地があった。そこは、祈りの場であると同時に、遊牧民のための市であり、遠隔地交易の場でもあった。また、莫大なワクフ財産によって運営される慈善事業のために多くの人々が集まっ

てもきた。

都市の郊外にバグがあるのは、イランや中央アジアではごく一般的な現象である。しかし、この場合のバグは、都市への農作物の供給地、都市住民の憩いの場などといった都市生活を補完する役割しか持ちえなかった。⁽⁸⁰⁾遊牧民政権の成立によって初めて、バグと市街地がいわば對等に結びついたのである。その意味で、東方イスラーム世界に特有なバグをあらゆる角度から研究することが是非必要である。

ところで、本稿で扱った都市の繁榮は、強制的に人々を集めて来る政治權力、大規模な消費を可能にする經濟力を持った遊牧民君主とその宮廷にかなりの程度依存していたことは間違いない。故に君主自身が亡くなったり、王朝が減んだりすると、一時的にその繁榮が失われたろうことは容易に想像される。しかし、既に本文中で見たように、これらの町は、それによって完全に減ってしまったわけではなく、その後も永く生き延びた。その最大の理由は、これらの都市の持つ「墓廟都市」的性格によるものであった。イスラーム世界に特有なワクフ制度が、都市を建設・維持して行く上で重要な役割を果たしていたのである。征服直後のイスタンブルでも、宗教施設群（イマーレット）を核として町の復興が計畫されていたことが林佳世子氏によって明らかにされているが、⁽⁸¹⁾この種の都市建設の起源（時代、場所）についてもあらためて検討してみる必要がある。

「牧地都市」的性格を持った都市の建設は、その後も十六世紀末まで引續き行なわれる。サファヴィー朝二代シャー、タフマースプによるカズヴィーンのサアーダーターバード *Sa'adatābad* 地區、五代アッバース一世によるイスファハーンのナクシェージャハーン *Naqsh-e Jahān* 地區はその代表例である。特に後者は、メイダーンを結節點としてバグ地區と宗教・商業地區が結びついたもので、形態的にナスリーヤのあったサーヘバーバード地區と酷似している。⁽⁸²⁾アッバースがこれをモデルにして都市計畫を行なったことは間違いない。その意味で、十四世紀初頭のカザン・ハンに始まる遊牧政權による都市建設は、十五世紀末の白羊朝のサーヘバーバード地區を経て、十六世紀末のシャー・アッバースによるイス

ファハーン建設にまでつながっていたと言えよう。

しかし、本稿で検討したナスリーヤまでの三都市とサファヴィー朝期の新都市には無視できない相違がある。サファヴィー朝期に新しく作られた都市には建設者の墓がないのである。タフマースプの墓はマシュハドのイマーム・レザー廟の聖域内に、アッバースのそれはカーシャーンのイマームザーデー・ハビーブ・イブン・ムーサー Imamzāda Habib ibn Mūsā 廟の中に作られたという。⁽⁸³⁾ サファヴィー朝期に入つて、君主の自らの墓に對する意識は大きく變化したのである。これがこの王朝による十二イマーム派國教化政策と深く關係することは確實であらう。このことも考慮に入れながら、東方イスラーム世界におけるムスリムの墓廟觀をイマームザーデ信仰の發展と絡めて追求して行くことは今後に残された興味深い研究テーマである。

ともあれ「牧地都市」と「墓廟都市」の性格を兼ね備えた都市の建設は、東方イスラーム世界においては、十五世紀末をもつて終わる。さらにシャー・アッバースのイスファハーン以降は、管見の限り、游牧民的な要素を強く持った政權による本格的な「牧地都市」建設も行なわれなくなる。それを游牧民政治權力の相對的な衰えによるものと見なすか、或いはもつと廣く、ヨーロッパ主導型の世界經濟確立期における東方イスラーム世界經濟の局地化・沈滯化の一現象として捉えるかはなお考究を要する問題である。

註

- (1) J. Aubin, "Éléments pour l'étude des agglomérations urbaines dans l'Iran médiéval", in *The Islamic City*, ed. S. M. Stern and A. Hourani, Oxford, 1970, pp. 69—71.

- (2) 本稿で用いる「東方イスラーム世界」という語は、トルコ・モンゴル系の游牧民が部族集團單位で軍隊の中核を占め

ることによって軍事力を掌握し、その力を背景に支配階級の主要部分を構成した國家の成立した時代、地域のことを意味する。一九八八年五月二八日、東洋文庫における「イスラーム國家論研究會」のシンポジウムで、この言葉の定義を説明し、あわせてこの歴史世界の發展に關して若干の考察を行なつたところ、多くの方々から有益なご意見を頂戴した。あら

ためて御禮を申し上げたい。その際、「東方イスラーム世界」という語は、アラブ語のマッシュリクと混同して紛らわしいという御指摘があったので、他に適當な用語がないか再度検討してみた。「イラン・イスラーム世界」という語も考えたが、この語では、意味がやや狭く限定され、當時のこの世界の地域的、民族的廣がりを必ずしも的確に表わせなう。暫時、上で述べたような意味で「東方イスラーム世界」という語を使用することを了解された。

(3) 特にヘラート、イスファハーンについての研究が活潑である。〈ヘラートについて〉 T. Allen, *A Catalogue of the Toponyms and Monuments of Timurids Herat, Cambridge, Mass.*, 1981, 同著者の *Timurid Herat, Wiesbaden*, 1983, L. Golombek & D. Wilber, *The Timurid Architecture of Iran and Turan*, Princeton, 1988, A. W. Najimi, *Herat: The Islamic City*, London, 1988, ともにこれらと関連して久保一之「一六世紀初頭のヘラート二つの新興王朝の支配―『史林』七―(一九八八)」、同「ティームール朝時代のヘラートにおける文化活動とその背景」『イスラムの都市性・研究報告』第三五號(一九八九)などがある。イスファハーンについては *Studies on Isfahan, Iranian Studies*, vol. 7, (1974), R. Quiring-Zoehe, *Isfahan im 15. und 16. Jahrhundert*, Freiburg, 1980, 拙稿「メイダーンとバークーシャー・ファッブースの都市計畫再考」『橘女子大學研究紀要』第一四號(一九八七)の中で紹介されている諸論考を参照のこと。また、最も新しい研

究として R. D. McChesney, "Four sources on Shah 'Abbās's Building of Isfahan", *Muqarnas*, 5 (1988) など。この二都市をも含むイラン都市全體については H. Gaube, *Iranian cities*, New York, 1979 など出ている。最近イランの都市研究が急速に進展している。M. Y. Kiani (ed.), *Nazari-yi iğmālī ba-šahr-nīsi va šahr-sāzi dar Īrān*, Tehran, 1986, *Šahrha-yi Īrān*, Tehran, 1987, H. Sulṭān-zādah, *Muqaddamah-i bar tārix-i šahr va šahr-nīsi dar Īrān*, Tehran, 1365 など参照のこと。

(4) この地の元來の地名については多くの意見がある。その主なものを挙げて D. Wilber, *The Architecture of Islamic Iran. The Ilkhanid period*, Princeton, 1955, p. 124. シヤームを地名のシリフと見るが、キートンが意味する *šarb* が訛ってシヤームとなったと考えるかが議論されている。一方、マッシュクルル氏はシヤームあるいはシヤムがシリフを指すのではないことを力説している。彼によれば、「シヤム」はアゼリ語で、平らで緑の場所を意味するところ。M. G. Mas'kūr, "Taḥqiqi dar bara-yi Šarb-i Ġāzan", *Bāstānsenāsi va hunar-i Īrān*, no. 3, éfé 1348/1969, pp. 23—24. 全く同様の文章が同じ著者の *Tārix-i Tabriz tā pāyāni qarn-i nuhum-i hiçri*, Tehran, 1352 (以下 *Tārix-i Tabriz* と略記), pp. 472—473 に繰り返されている。

(5) アンリ・スチールラン著、神谷武夫譯『イスラムの建築文

化」原書房、一九八七、一〇二頁。A. U. Pope, *A survey*

of Persian art, vol. III, p. 1018, vol. VIII, p. 282.

- (6) 本田實信「イルハンの冬營地・夏營地」、『東洋史研究』三四一四(一九七六)・一〇四頁。アルグンの墓所の發見と正確な位置「現狀を以てするに非ず」R. Zipoli, "The tomb of Arghun", *The proceedings of Primo convegno internazionale sull'arte dell'Iran islamico*, Venezia-Tehran, 1978 參照。

- (7) Rašid al-Din, *Ġāmi' al-tawāriḫ*, III, ed. by A. Alizade, Baku, 1957 (タレ ĠT ヲ註記), pp. 415—416.

- (8) ĠT, p. 416.

- (9) ĠT, p. 324.

- (10) ĠT, pp. 346—347.

- (11) ĠT, pp. 324, 410sq.

- (12) ĠT, p. 416.

- (13) Cf. "Le prétendu effondrement de la coupole du mausolée de Qazān Xān à Tabriz en 705/1305 et son exploitation politique", *Studia Iranica*, 15—2 (1986), pp. 267—270.

- (14) ガザンの墓廟の建築學上の問題に關しては A. U. Pope, op. cit., pp. 1054—56, D. Wilber, op. cit., pp. 16—22, 124—126 參照。

- (15) ĠT, pp. 417—424, Vassāf, *Tā'riḫ-i Vassāf*, Tehran, 1338 (一一二九年ギンベイト版のタナヤナル印刷版), pp. 382—383.

- (16) この施設の機能については、岩武昭男「ニザーム家のワクフと一四世紀のヤズド」『史林』七二—三(一九八九)・二七頁。岩武氏によればヤズドの「サイイドの家」は、(1)サイイドたちの宿泊施設、(2)サイイドへの慈善の據點、という二つの機能を持っていたという。ガザンが、預言者の血をひくサイイドを丁重に遇し、タブリーズ以外にも、イスマファーン、シーラーズ、バグダードなどに「サイイドの家」を建てたことは、ĠT, p. 399.

- (17) ホンダ「ムルビヤ」によれば、ガザンが兵士と農民の安寧(*ṭiṣāḥiyat*)のために定めたる税金(*umar-i mulk o māḍ*)の減免が置かれていたという。Ġ. Xwandamir, *Ḥabib al-siyar*, ed. Dabir Siyāqī, Tehran, 1333, vol. 3, p. 188.
- (18) Hamid Allah Mustawfi Qazvini, *Nuḥat al-Qulūb*, ed. G. Le Strange, London, 1915, p. 76.

- (19) ĠT, p. 414.

- (20) ĠT, pp. 417—424.

- (21) ĠT, p. 423.

- (22) 例えは、ガハニーヤと殆ど同時期に建設されたタブリーズのホーン・モスクによつて S. S. Blair, "Ilkhanid Architecture and Society: an Analysis of the Endowment Deed of the Rab'-i Rashidi", *Iran*, vol. XXII (1984), pp. 67—90. ヤズドのニザーム家のモスクによつては前掲「岩武論文」を參照。

- (23) ĠT, p. 412.

- (24) ĠT, pp. 346—347. 本田實信「スルターニーヤ建都考」

- 『東方學會創立四十周年記念東方學論集』（一九八七）（以下「スルターニーヤ」と略記）七三五頁。
- (25) Aubin, op. cit., p. 71, 本田實信「前掲『イルハンの冬營地・夏營地』八三頁、同「スルターニーヤ」七三四頁。羽田正「前掲『メイダーンとバグ』三二七頁。
- (26) クラビホ『ティムール帝國紀行』（山田信夫譯）桃源社、一九七九年、一九三—二四五頁。なおサマルカンドのノータについては、バーブルの記録が参考になる。間野英二「『バーブルナーマ』の研究(1)「フエルガーナ章」日本語譯」『京都大學文學部研究紀要』第二二（一九八三）、二五二—二五六頁参照。各バグの大體の位置については、上掲 Golombek & Wilber, *The Timurid Architecture of Iran and Turan*, vol. II, map. 7.
- (27) 前掲 Allen の二著を参照。
- (28) ベーヤー・シャーン・ナーラーに引く Allen, *Timurid Herat*, pp. 51—52, W. Ball, "The remains of a monumental Timurid garden outside Herat", *East and West*, 31 (1981) 参照。一五〇六年のバーブルのクラートに引くのは間野英二「バーブルとクラート」『オリハント』一三三—一三八頁がある。
- (29) *Nuzhat al-Qulub*, p. 76.
- (30) Evliya Çelebi, *Seyahannamesi*, Istanbul, 1314, vol. 2, pp. 265—266.
- (31) Rasîd al-Dîn, *Târix-i muḥarrak-i ġāzāni*, ed. K. Jahn, London, 1940, p. 94.
- (32) ĠT, p. 300.
- (33) Ḥāfiẓ Abū, *Dayl-i ġāmi' al-tavārix-i ra'īdi*, ed. X. Bayāni, Tehran, 1350, p. 234, Abū Bakr al-Qūbī al-Āhrī, *Târix-i Šayx Ubayy*, fac. ed. & tr. J. B. Van Loo, 's-Gravenhage, 1954, p. 77, 177. Šaraf al-Dīn 'Alī Yazdī, *Ẓafar nāma*, fac. ed., Tashkent, 1972, fol. 179a. シヤイの變遷を含むタンドリス史の概略に引くは EI のヘルスキーンによる記事が今日ゆゑな参考となる。
- (34) Xwāndamīr, op. cit., vol. 4, p. 600, Ḥasan Rūmlū, *Aḥsan al-tavārix* (vol. XII), ed. 'Abd al-Ḥusayn Navāi, Tehran, 1357, p. 424.
- (35) ĠT, p. 214.
- (36) タマタ税に引くは、本田實信「タマタ (TAMTA) 税に就いて」『和田博士五稀記念東洋史論叢』（一九六〇）一三八四—四頁。
- (37) H. A. R. Gibb, *The travel of Ibn Baṭṭuta*, vol. II, Cambridge, 1959, p. 344.
- (38) Ḥāfiẓ Ḥusayn Karbalāi Tabrizi, *Rawḍat al-ġinān wa ġannāt al-ġanūn*, ed. Ġ. Sulḥān al-Qurrāi, Tehran, 1349 (イレ RĠ の註記), vol. I, p. 434, vol. II, p. 655. M. Ġ. Maškū, *Târix-i Tabriz*, p. 864.
- (39) *Aḥsan al-tavārix* (vol. XII), p. 198.
- (40) ガザンは自らの墓廟の管財人にラシーヌ・ウ・マティーンを任じたといふが、同時代のイルミナ語史料によつてそれを確認できない。Cf. *Târix-i Tabriz*, p. 481.

- (17) Iskander Munshi, *Tarix-i 'alam arā-yi 'abbāsī*, ed. I. Afšār, Tehran, 1350 (イラク TAA 文庫版), p. 148.
- (18) トラビーズのイブンバダウーン F. Bémont, *Les villes de l'Iran*, Paris, 1969, pp. 147—178 参照。またこの聖廟のモティフについて、主として現代の巡禮を扱った研究ではあるが N. Hakami, *Pèlerinage de l'Imām Reza. Etude socio-économiques*, Tokyo, 1989, pp. 23—29 参照。
- (19) J. Aubin, "La propriété foncière en Azerbaydjan sous les Mongols", *Le monde iranien et l'Islam*, IV (1976—77), pp. 79—132.
- (20) TAA, p. 639.
- (21) TAA, p. 822.
- (22) TAA, p. 826.
- (23) タブリーズの建造物の度重なる地震による損傷、崩壊について C. Melville, "Historical monuments and earthquakes in Tabriz", *Iran*, XIX, 1981 参照。
- (24) Evliya Çelebi, op. cit., p. 266.
- (25) J. B. Tavernier, *Les six voyages en Turquie & en Perse*, ed. S. Yerasimos, Paris, 1981, vol. I, p. 109. メルボル氏によればこの地震は一六四一年の誤りだとする。Cf. Melville, op. cit., p. 166.
- (26) L. Langlès, *Voyages du Chevalier Chardin*, Paris, 1811, vol. 2, p. 323.
- (27) E. Flandin, *Voyage en Perse*, Paris, 1851—52, vol. I, p. 175.
- (28) R. D. McChesney, "Waqf and public policy: The waqfs of Shah 'Abbās, 1011—1023/1602—1614", *Asian and African Studies*, 15 (1981), pp. 165—190.
- (29) この都市に関する参考文献の主要なものは、前掲本田實信「スルターニーヤ」にきちとして引用されている。なお、本田論文と殆ど同時期に S. S. Blair, "The Mongol Capital of Sultaniyya, "the Imperial", *Iran*, vol. XXIV (1986) が発表された。参見せよ。また同氏は「The epigraphic program of the tomb of Uljayu at Soltaniyya: Meaning in Mongol architecture», *Islamic Art*, 2 (1987) 参照。筆者は未見である。
- (30) 本田「スルターニーヤ」三七三頁。
- (31) *Nuzhat al-Qulub*, p. 55.
- (32) 本田「スルターニーヤ」三七六—三七七頁。なお、本田氏は、『集史』にはアルクン＝ハンがクントル・ウランの地と新都市を造營したという記事は見出せないう。上述のようにされるが、何かの誤解であろうと思われる。アルクン＝ハン紀に「(アルクンは) シャルヤーズと第一大都市を建設した」という記事があるからである (GT, p. 223)。
- (33) *Nuzhat al-Qulub*, pp. 55—56. 本田謙 («スルターニーヤ」三七九—七四〇頁) によれば。
- (34) 本田「スルターニーヤ」三七四頁。Blair, "The Mongol Capital", p. 145.
- (35) 本田「スルターニーヤ」三七三頁。
- (36) 本田「スルターニーヤ」三七四—三七四頁。

- (52) R. D. McClesney, "Waqf and public policy: The waqfs of Shah 'Abbās, 1011—1023/1602—1614", *Asian and African Studies*, 15 (1981), pp. 165—190.
- (53) この都市に關する参考文献の主要なものは、前掲本田實信「スルターニーヤ」にまづいて引用されている。なお、本田論文と殆ど同時期に S. S. Blair, "The Mongol Capital of Sulṭāniyya, "the Imperial"', *Iran*, vol. XXIV (1986) が發表され、參考となる。また同氏には、"The epigraphic program of the tomb of Uljaytu at Solṭāniyya: Meaning in Mongol architecture", *Islamic Art*, 2 (1987) 44—49 が、筆者は未見である。
- (54) 本田「スルターニーヤ」七三六頁。
- (55) *Nuzhat al-Qulub*, p. 55.
- (56) 本田「スルターニーヤ」七三六—七三七頁。なお、本田氏は、『集史』にはアルグン・ハンがクンクル・ウランの地に新都市を造營したという記事は見出せなぬ。」と述べておられるが、何かの誤解であろうと思われる。アルグン・ハン紀に「(アルグンは)シャルヤーズにも一大都市を建設していた。」という記事があるからである(ĠT, p. 223)。
- (57) *Nuzhat al-Qulub*, pp. 55—56. 本田譯「スルターニーヤ」七三九—七四〇頁)による。
- (58) 本田「スルターニーヤ」七四三頁。Blair, "The Mongol Capital", p. 145.
- (59) 本田「スルターニーヤ」七三七頁。
- (60) 本田「スルターニーヤ」七四三—七四四頁。

- (16) J. Aubin, "Réseau pastoral et réseau caravanier. Les grand'routes du Khurassan à l'époque mongole", *Le monde iranien et l'Islam*, 1 (1971), pp. 105—130.
- (17) Blair, "The Mongol Capital", p. 144.
- (18) Hâfiz Abrû, *Dayl-i ġami' al-tavârix-i rašidi*, p. 68. 本田「スルターニーヤ」七四五頁。
- (19) 但し「スルターニーヤ」は *gal'a* と呼ばれる城塞があったが、シヤームにはそれが認められなう (本田「スルターニーヤ」七三九—七四一頁、Blair, op. cit., pp. 142—143) など、兩者の間に相違點が全くなうわけになう。
- (20) 本田「スルターニーヤ」七四五頁。
- (21) 本田 *Maydān-i Šāhib al-amr* とし、名で知られる *maydān* になう。Cf. *Tāriz-i Tabriz*, pp. 240—241. マンタール所收の十九世紀の地圖では (一〇四頁) 市街の中央やや北のメイダーネ＝チャーイー *Maydān-i Ċai* 川右岸にその名が見える (八尾師誠氏の御教示による)。但し、ウスマ氏にすれば、今日では「その跡はもう残っていないなう」う。J.E. Woods, *The Aqqunlu. Clan, Confederation, Empire*, Minneapolis & Chicago, 1976, p. 150, note 47. また上掲メルヴェル論文一六五頁の略地圖を参照のこと。
- (22) RĠ, vol. I, p. 470.
- (23) *Ibid.* Abū Bakr ġihrānī-ġsfahānī, *Kitāb-i Diyār Bakriya*, ed. N. Lugal & F. Sümer, 2 vols, Ankara, 1962—64, p. 437.
- (24) RĠ, vol. I, pp. 90—91.
- (25) RĠ, vol. I, p. 570.
- (26) *Kitāb-i Diyār Bakriya*, p. 523. ガザン＝ハンが、罪人を處刑したタブリーズのメイダーンを或うはうのメイダーンのことかふわけになう。Cf. ĠT, p. 324.
- (27) イスマハンンの二つのメイダーンについて、上掲拙稿「メイダーンとベーク」参照。
- (28) *The travels of a merchant in Persia*, (Hakluyt Society 49), London, 1873, pp. 173—178.
- (29) Hasan Rūmlū, *Aḥsan al-tavārix* (vol. XI), ed. 'Abd al-Ḥusayn Navāi, Tehran, 1349, pp. 622, 627.
- (30) *Tāriz-i Tabriz*, pp. 744—745.
- (31) Gaube, *Iranian cities*, pp. 76—78.
- (32) 處刑: TAA, p. 160, 註ロを付す: TAA, p. 298, 678, アンシャーナー: TAA, p. 298, ヤクン: TAA, p. 124, 會見: TAA, p. 100, 300, 681.
- (33) TAA, pp. 317, 343.
- (34) メルヴェル氏によれば、ナヌリヤは、一七八〇年の地震で崩壊したとす。一八二六年 Mirzā Mahdi Qādi によつて全面的に修復されたとす (Melville, op. cit., p. 171)。
- (35) ハークそのものを取り扱った本格的な研究は、筆者の知る限りない。起源や生産物について *Encyclopaedia Iranica* の記事が参考になる。
- (36) 山本佳世子「十五世紀後半のイスタンブールメフメト二世の復興策を中心に」『お茶の水史學』二五號 (一九八一) 七一—三頁。

- (82) タフマースプのサファードターバード地区については、TAA, p. 124, Qaḍīr Ahmad Qumī, *Kulāfat al-taḥvīrīr*, ed. I. Isrāqī, Tehran, 1359s, p. 312 に簡単な描寫がある。この地區にもメイダーンがあり、形態的にはタブリーズのナスリーヤ地區、後のイスファハーンのナクシエ＝ジャハン地區と同様であったようである。また E. Esrāqī, "Description contemporaine des peintures murales disparues des palais de Šāh Tahmāsp à Qazvīn", dans Ch. Adle (éd.), *Art et société dans le monde iranien*, Paris, 1982 も参照のこと。アッバースのナクシエ＝ジャハン地區に関しては上掲拙稿「メイダーンとバーク」参照。
- (83) TAA, pp. 123, 526—528, 1079. タフマースプの遺體は、初めカズヴィーンのユルト＝シールヴァーニーに埋葬され、イスマール二世がマシヌバドに再埋葬した。その後、アッバース時代初期に、一時ウスベク族がこの聖都を征服し、大略奪を行なう。イスカンドルムンシーによれば、この

時、タフマースプの遺體は奇跡的にウスベクの手におちるのを免れ、アッバースによって、アルダビールに再々埋葬されたという。また、アッバースの墓について、A. Godard, "The tomb of Shah 'Abbas", *Bulletin of the American Institute for Persian art and archaeology*, IV—4 (1936), サファウダー朝、カーシャーハル朝歴代王の墓所について、'A. Iqbāl, "Az ibidā-yi Šafavīya tā āxir-i Qāğārīya pādšāhān-i Irān har yak dar kuḡā madafunand?", *Yadgar*, 3—2 (1946—47) がある。

〔付記〕 本稿は、一九八九年一〇月二日から二八日まで東京三鷹の中近東文化センターで開催された《International Conference on Urbanism in Islam》で筆者がその要旨を口頭発表し、會議と同時に出版された *Proceedings* の第二巻に掲載された英文原稿 "Qazāniyya in Tabriz" に大幅に加筆、修正を施したものである。

THE PASTORAL CITY AND MAUSOLEAN CITY

—Nomadic Regime and City Building in the Iran-Islamic World—

HANEDA Masashi

This paper will examine some new developed cities during the Turkish and Mongol nomadic regimes such as Ġazanīya, Sulṭānīya and Naṣrīya in 14th and 15th centuries (from the Īlkhān dynasty to the Ag Quyunlu dynasty). Through the common features of their city styles, one can notice how it related to the pattern of the city which was built under the Safavids.

Among these three cities, several similarities can be observed. Firstly, the place inhabited by nomadic tribes provided fertile water and Bāġ. Secondly, the tomb of the sovereign surrounded by religious building complex was located at the centre of the city. Thirdly, finances donated for religious purposes greatly maintained its city function. Thus, when the cities are called pastoral cities, they must be described as mausolean city as well.

The characteristic of a pastoral city, like the organic composition of Bāġ and Maydān, which can be found in Naṣrīya, was continuously inherited in establishing Isfahān by Šāh ‘Abbās. However, the nature of a mausolean city, due to the change of imperial mausolean concept, gradually disappeared.

A BRIEF ANALYSIS OF YE SHI 葉適'S THOUGHT

UCHIYAMA Toshihiko

This paper intends to analyze the thought of the representative Yongjia 永嘉 school thinker, Ye Shi 葉適 (1150—1223) in the Southern Song dynasty.